



ひかり

令和4年9月2日
第8号



挑戦の夏、その先には

今年の夏、和光中学校は20年ぶりに「全日本吹奏楽コンクール香川県大会」に出場しました。他の学校でよく目にする吹奏楽部の夏の景色は、「卒業した先輩が休日に中学校へ来て後輩たちに指導する姿」や、「コンクール当日の早朝、高校生の先輩たちが大太鼓や鍵盤など巨大な楽器をトラックに積み込み、その後、県民ホールに到着したトラックから楽器を運び出す姿」です。

一方、20年もの間コンクールに出場していなかった和光中には、誰一人として手伝ってくれる先輩はいません。顧問の大塚先生も、教員として生徒を連れてコンクールに参加するのは初めての経験。つまり、「すべての人にとってすべてが初めてのこと」だったのです。それでも心細い気持ちに負けることなく、皆で本番に向けてひたむきに練習に励みました。

本番まであと3週間余りとなった頃、三観地区の中学校吹奏楽部が、詫間マリンウェーブの舞台上で中間発表会を開催しました。その場にいた4人の音楽の先生から後で聞いた話ですが、この発表会で最も注目していたのは和光中学校の演奏だったそうです。「20年ぶりに和光が出場」と聞いた時から「大丈夫かなあ。」と心配していたそうです。そして、この日の夕方、2人の先生から携帯に連絡が入りました。「どうでしたか？」と尋ねると、「和光の子の音を聞いたら、これまで真面目に一生懸命練習してきたのが分かった。伝わってきた。全体で合わせるところはまだまだやけど、応援したいという気持ちになったわ。」と返ってきました。それを聞いて、居ても立ってもいられず、3階で練習している吹奏楽部の人たちのところへ行ってこの言葉を伝えました。

そして迎えたコンクール本番の日。トラックから楽器を下ろすとすぐに楽器と共にステージ裏へと移動し、出番が来るまでの間、打楽器3人組と一緒に汗だくになって、少しずつ前へ前へと楽器を運んでいきました。そしてついに和光中が出番がやってきました。「2分間で全部の楽器を舞台上に設置完了」というルールを守るべく、緊迫した空気の中で見事「1分40秒」でやり遂げました。事前に学校で楽器運びの練習をし、何度も打合せをやったかいがありました。

その後、初舞台での演奏を終えて学校に戻ってきたとき、「緊張した人は？」と尋ねると、ほぼ全員が迷わず手を挙げました。「そうか、いい経験を積んだなあ。さあ、次の舞台で緊張しないためにはどうしたらいいと思う？」と問いかけ、少し間を空けてから次のように語りかけました。「結局、練習するしかないんです。これ以上できないと心底思えるまで練習してきた自分を信じる力(=自信)が湧いてきたときに、初めて緊張は消えるものです。」と。真剣な眼差しでうなずきながら話を聞く皆の表情は輝いて見えました。全員の肩に付けた肩章は、共に力を合わせ、心を燃やして頑張ってきた仲間にはしか与えられない『勲章』のように思えました。



【肩に付けた仲間の証】

さて、49日後の10月22日、我らが和光中にもう一つ、初めてのことに挑戦します。それは、「縦割りチームによる合唱」です。夏休みの課題であった音取り練習の成果が、6日(火)から始まるチーム練習で十分発揮されることを期待しています。

【保護者の皆様へ】

1年間で最も長く行事の多い2学期が始まりました。生徒にとって思い出深い充実した日々となるよう支援させていただきます。引き続き、本校の教育活動にご理解、ご協力をお願いいたします。

